

授業科目名	語学・文学総合演習（漢文学）(2100260)		
時間割名	語学・文学総合演習（漢文学）(31112)		
時間割担当	山田明広		
実施期	後期	単位数	2 選択
曜日・時限	水・1		

授業の目標・概要

漢文はかつて東アジアの共通言語だったが、民族固有の言語の干渉を受けることもあり、複雑で多様な様相を呈している。しかし、そのためにかえって独特の魅力を放っているという点では、日本漢文も例外ではない。その多面的な漢文世界の実態を、漢文の精読と、概説書の講読を通して理解する。規範的な漢文とはいえない文章でも訓読し、内容を把握する能力を身につけるとともに、東アジアを視野に据えて、日本漢文を位置付けられるようにする。

学習の到達目標

本授業の目標は以下の2点である。 規範的とはいえない漢文でも訓読し、内容を把握できるようになる。 日本漢文や東アジアの漢文について、国語科教員として必要不可欠な知識を身につける。

授業方法・形式

学期前半は、漢文を精読する授業。書き下し文を作り、語の意味を確認した上で、現代日本語訳を作成し、内容を理解する。学期後半は、グループでの発表。概説書を読み、グループ内で共通の内容理解に達すること、協働での発表に力を注ぐこと、がもめられる。

授業計画

第1回 オリエンテーション 授業前半は、授業の到達目標、進め方、評価、計画について学習する。授業の後半は、『近古史談』とその著者大槻盤溪について知識を深め、予習の仕方について学ぶ。

第2回 『近古史談』「山内一豊之妻」(1) 「山内猪右衛門一豊」から「黄金十両矣」まで読む。内容を訓読と現代日本語訳により理解した後、一豊が涎を流すのを我慢できなかった理由について考える。

第3回 『近古史談』「山内一豊之妻」(2) 「妻曰、夫君必欲獲之」から「何卿之忍耶」まで読む。内容を訓読と現代日本語訳により理解した後、一豊が「且つ喜び且つ恨ん」だ理由について考える。

第4回 『近古史談』「山内一豊之妻」(3) 「妻曰、夫君言亦有理」から「遂購其馬」まで読む。内容を訓読と現代日本語訳により理解した後、「泣きて謝して…」の部分の「謝」の意味について考える。

第5回 『近古史談』「山内一豊之妻」(4) 「無幾、簡馬之期至矣」から「遂以見任用」まで読む。内容を訓読と現代日本語訳により理解した後、織田信長が一豊を評価した理由について考える。

第6回 『近古史談』「山内一豊之妻」(5) 「寧静子曰」から「山内氏何外家之福之多耶」まで読む。内容を訓読と現代日本語訳により理解した後、盤溪の論纂の特色、批評の妥当性について考える。

第7回 確認チェックテスト 授業の前半は、漢文「山内一豊之妻」に対する理解度を問うテストを実施。授業の後半は、グループ分けを行い、グループごとに発表の準備を進める。

第8回 訓読という翻訳手段 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第1章第1節「訓読とは何か」を主な教材とする講義を聞き、グループ発表のイメージをつかむ。質疑応答を経て、要点を整理する。

第9回 日本の訓読(1) 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第1章第4節「草創期の訓読 奈良末期から平安末期まで」担当のグループがプレゼンテーションを行う。質疑応答を経て、要点を整理する。

第10回 日本の訓読(2) 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第1章第5節「完成期の訓読 平安末期から院政期まで」担当のグループがプレゼンテーションを行う。質疑応答を経て、要点を整理する。

成績評価の基準

授業計画

第11回 日本の訓読(3) 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第1章第6節「訓読の新たな展開 鎌倉時代から近代まで」担当のグループがプレゼンテーションを行う。質疑応答を経て、要点を整理する。

第12回 日本の訓読(4) 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第1章第7節「明治以降の訓読」担当のグループがプレゼンテーションを行う。質疑応答を経て、要点を整理する。

第13回 朝鮮半島の訓読 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第2章第1節「朝鮮半島の訓読」担当のグループがプレゼンテーションを行う。質疑応答を経て、要点を整理する。

第14回 中国周辺の訓読現象 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第2章第4節「中国周辺の訓読現象」担当のグループがプレゼンテーションを行う。質疑応答を経て、要点を整理する。

第15回 東アジアの詩の世界 『漢文と東アジア 訓読の文化圏』第3章「東アジアの詩の世界」を主な教材とする講義を聞き、東アジアの訓読の文化圏の全体像を理解し、総まとめとする。

成績評価の基準

毎回の授業でワークシートを提出。授業の理解度を問う(50%)。前半の漢文の確認チェックテストの評価(20%)。セメスター後半の概説書のグループ発表の評価(30%)。出席回数が授業全体の2/3未満である場合には不可0点とする。

準備学習・復習及び授

予習：前半は漢文精読なので、白文をノートに書き込んでおく。書き下し文や日本語訳も事前に書き込んでおくのがぞましい。後半は概説書の節をチームごとに分担して、内容について発表する。

履修上のアドバイス及

「漢文学入門」「漢文学」「漢文学」を受講した後に受講するのがぞましい。

教材・教科書

配付プリントを使用。

参考書

・参考書 久保天随講述『独修近古史談講義』（積善館本店）、菊池真一編『近古史談』本文編（和泉書院）、森岡ゆかり『近代漢詩のアジアとの邂逅』（勉誠出版）